

京町家が作る景観

馬崎俊一

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

私は京都の景観が好きだ。皆さんは京都の景観と聞いて何を想像するだろうか。私は祇園の写真を「京都らしい、趣がある」と感じる。では一体何がそう思わせるのだろうか。写真を構成する要素を分解してそれぞれの理解を深めたいと思う。



写真を分解してみると石畳、提灯（ちょうちん）、京町家、駒寄せ（こまよせ）、犬矢来（いぬやらい）の5つで構成されている。石畳から概要、歴史などを紹介していく。調べてみると石畳は京都だけにあるものではなく、全国的にみられるものである。石畳は古くから神社仏閣にみられ、明治10年にアスファルトが普及するまで道路を補強する主

な方法だった。その流れは海外でも同じで、ヨーロッパでも石畳が敷かれていた。しかし、ヨーロッパの石畳は次の写真のような「ピンコロ石」が使われており、日本の石畳で使われている石とは大きな違いがある。このピンコロ石は、日本の石畳より小さく大きな荷重に耐えられない。そして自動車の通行が多くなった今日では悪路になりつつ、問題になっている。石畳は昔から国内外で道路舗装の主な方法だったことが分かった。京都の石畳は祇園の写真にあるように修繕されている場合が多いので、悪路にならずに済んでいる。



次に提灯について言及していく。提灯は和の雰囲気の色濃く醸し出す装飾品だ。現代における提灯の原型となったものは、室町初期に中国から渡ってきたと考えられている。しかしそれは竹籠に紙を張っただけの折り畳みができないタイプで、葬儀などに使用されていた。現代のような折り畳みの提灯が生み出されたのは室町末期頃だとされる。細く割り丸く癖付けした竹を骨としてそれに和紙を張り、上下に伸縮が可能なこの構造は中国ではなく日本発祥である。そして江戸中期にろうそくの価格が安価になったことにより庶民にまで普及し、現在でも居酒屋の看板などで親しまれている。現在、提灯の用途は様々で、おしゃれな



インテリアとしても活用されている。

次に京町家、駒寄せ、犬矢来について言及する。京町家の始まりは平安時代にさかのぼる。公家たちが地方から徴用した人々が、通りに面した土地を公家たちから買い取り、暮らしの拠点を道路に面した空間に求めた。そこに小屋を造ったのが京町家の始まりのようだ。京町家はやがて軒を連ねて建ち並び、通りは単なる都市施設ではなくなり、会話や様々な活動が営まれる場となった。町家はかつて全国的に見られたが、太平洋戦争時の爆撃でその多くが焼失してしまった。京都に京町家が多く残っている要因は太平洋戦争時に爆撃地として指定されていなかったことにある。

京町家とひとくくりにいっても、その定義はあいまだが、1950 年以前に京都市内に建てられた木造建築の家屋の総称となっている。京町家の特徴として代表的なのが「うなぎの寝床」と呼ばれる、間口が狭く奥行きが深いつくりだ。それに加え「駒寄せ」、「犬矢来」がある。駒寄せは町家の正面に設けられた柵で、本来、牛や馬をつなぎとめておくためのものであったが、今日では軒下に人や犬が入ることを防ぐためにつけられている。犬矢来の用途は様々あり、犬の小便を壁に掛けられないようにするため、泥棒除け、雨天時の泥水の跳ね返りを壁に当てないため、などがある。この駒寄せと犬矢来の両方に共通していることは自分たちの安全な居住スペースを確保するという点にある。



写真のように屋内と通りの間が30センチ～50センチほどの距離しかない町屋が多い。つまり暮らしている部屋と通りの距離が狭すぎるので軒先で人が談笑したり、犬や猫が小便をすることは生活の場所が過剰に侵害されることになる。そのためほんの少しの空間を「部屋」と「通り」の間に設けることで住居としての安全を確保しているのだ。

ここまで京町家、駒寄せ、犬矢来の概要などについて述べてきたが、ここから京町家の現状と未来について述べていく。京町家の数は減少し続けている。バブル期にはマンションへと変わり、コロナ前までは外国人観光客のためにホテルへと変わった。京都市の平成 20～21 年度の調査では 4 万 7735 軒あった京町家が、28 年度の調査では 4 万 146 軒に減少したとある。少なくとも 5602 軒が失われた。そこで京都市は京町家の保全及び継承を推進することを目指し、平成 29 年 11 月に「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」（京町家条例）を制定した。この条例は京町家の所有者が早い段階で取り壊しの届け出を市に提出することによって市が京町家の幅広い活用法を示し、京町家の保全を行う条例だ。私はそういった市の施策に加え京町家の価値を上げる有効な利用方法を見出してほしいと思う。現在でも京町家カフェ、京町家雑貨店など、京町家の古風な雰囲気とマッチ

させたビジネスが多い。そういった京町家の特徴をうまく利用できるお店が増えれば、価値は上がり、取り壊されることも減少すると考える。

今回、自分の好きな景観を構成している要素を分解し、それぞれを可能な限り調べた。そこで分かったことは昔の京都の雰囲気を継承する難しさである。時代は絶えず変わり、文化をすべて継承することは不可能な場合が多い。だからこそ市の施策などで一部を保全する重要性とその苦勞が分かった。私が「京都らしい」と感じる好きな景観が未来に継承されることを願う。

参考

<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000228362.html>

<https://iemaga.jp/dreamhouse/vol04/>

<https://zuumonline.com/archives/152347>

<https://tanken.com/hosou.html>